

〈農〉(的共同体)の現代的意義と、近代的共同体論の問題性

——現代の“人間の危機”克服の視点から——

亀山純生 (東京農工大学)

はじめに——問題意識と論点 (大会レジュメ集参照)

1. 膨大な近代批判も、〈農〉への思想的注目の弱さ。 尾関 (2009) 提起の画期性
Cf. 風土的環境倫理から (亀山 2005)、風土コンセプトの脱近代的な地域再生 (亀山 2009a)
風土の核心：生活的自然との生身の共同的関わり (共同関係) → **広義での〈農〉(的共同性)** に注目
2. 報告の骨子
①現代の“人間の危機”とコミュニティ論から、②脱近代にとって〈農〉の人間学的、地域共同社会形成的意義→③近代的共同体論の理論的“陥穽”(思想的近代呪縛の面) →脱近代の思想的留意点の確認

(一)現代日本の疎外の窮極と“人間の危機”

1. 日本の高度消費社会と人間疎外

1) 疎外の“理念型”的全面化：“煮詰められた近代的疎外”

- ①近代 (=資本主義主導の大工業文明と市場社会)の“完成” →日本近代化の矛盾の“窮極”
- ②日本近代化の特殊性：後進性のイデオロギー呪縛と農業・農村破壊と極端な都市化・都市集中。

2) 近代の人間疎外の総括的特徴 (“理念型”?) (亀山 1989) Cf. マルクス労働疎外論 (+フロム疎外論)

cf. 高度消費社会 (=生活の全面的市場化)。 青少年の“無気力”、いじめ、生きる力・身体力衰退等の注目、

- (1) 生活活動の対象の疎外 (①育児・教育・介護まで人間の生活と条件の全面的商品化、②市場支配による文化的・社会的環境の反人間化、自然環境の荒廃、③制度・組織の抑圧化)、
- (2) 生活活動自体の疎外 (①個人の自由と主体性の喪失。自由の名による選択の強制・“受容的構え”、
- (3) 類的本質 (人間らしさ) の疎外 (①目的意識、創造性、共同性、感情の豊かさの喪失、②能力の一面化、③身体能力・健康の障害、④意味の喪失)、
- (4) 人間自体の疎外 (①人間のアトム化、②他者への無関心、③利己主義と他者の手段化、④人間関係の敵対化)。

特に (5) 欲求の疎外 (①欲求における目的と手段の転倒 (貨幣欲求が象徴)、②欲求の量化と質的欲求の衰退、③欲求の貧困化、④欲求の利己主義化=共同性欲求の疎外 (対立志向)・・・人間疎外の核心 cf. 人間の本質=共同性

→意味・アイデンティティへの欲求の不可避性→共同性欲求の回復の不可避性(cf. 共同性×は「人格崩壊」の危険)。

○近代的疎外の“定番的”特徴づけ、日本の高度消費社会の疎外の“予見”

2. 現代の人間疎外の新段階 (80 年代予想を超えて) “人間らしさ”の喪失から“人間の危機”へ

Cf. 90 年代～、IT 革命による情報社会化、グローバル資本主義化による疎外の全面化・深刻化

疎外の現代的核心：青少年の“孤人”化、および“他者喪失と現実喪失”

- (1) 象徴的表出 「引き籠り」：若者 (15~39 才) で 70 万 (1.8%)、同予備軍 155 万 (4.0%) (内閣府：朝日 7/24)
- (2) 日本の高度消費社会に構造的な“孤人”化傾向

門脇 (2010)：70 年代～子どもの「非社会化」傾向——“異常行動”・諸問題の根底に

①人と関わりが嫌い・苦痛、②他人への無関心、③他者と没交渉に一人で過ごす、④人間や社会に不信任
核心に、「他者の喪失」「現実の喪失」 cf. 心象世界の生身の人間不在、無機質化

○高度消費社会の人間疎外の“純粋培養型” ——都市型環境 (「空間の無機質化」「人間関係の希薄化」) の産物

3. “人間の危機”の深刻さ——デススパイラル構造

(1) “孤人化”による“人間力”喪失→“人間(そのもの)の危機”

他者不在→道徳性崩壊 (“倫理融解”)、自己 (のリアリティ) 解体→生命的身体 (生命感) 喪失→対象・世界のリアリティ喪失・・・人間の無機化 (「動物化」東 2001) =人間の非人間化

- 近代（古代以来）共通前提の人間の“普遍的”質（人間のミニマムの素質＝“人間力”）の歴史的崩壊
- (2) **疎外の主体的（内発的）克服の展望喪失** Cf. “人間力不在” ≠若者のノンモラル・無秩序社会化。
- 1) “関係（つながり）”重視の“よい子”の若者：“道徳”（世間）・「空気」に忠実。“人間力”重視。
 - 2) だが、**関係主義の中の孤立**（「みんなぼっち」豊泉 2010）——**孤独感なき孤立（“孤人主義”）**
→ “人間力”形成の抑圧化（“みえない抑圧”後藤他）：①自己性・個性（“差異化地獄？”）、②対他関係（見田「まなざし地獄」、土井 2007「友だち地獄」）、③身体力（→エステ“地獄”・臭い恐怖）・・・
 - 3) **現在の生活に満足傾向**（20代 70%、30代 60%、高校生 93%；「多幸な若者」豊泉 2010）
- 出口が見えない“人間力”不在の悪循環（デススパイラル①）**
疎外内発的克服のテコ（人間力）の抑圧化→要の“他者”忌避（“孤人化”）→現状安住（“孤人主義”）→疎外深刻
疎外（抑圧）の欲求（＝疎外の“窮極の完成”）→**実践的疎外論**（疎外状態から内発的な克服へ）の“破綻”
- (3) **人間力喪失の再生産過程への突入（デススパイラル②）**
“孤人主義”の第一世代（「サンマ世代」門脇 2010）——**若い親の中心、社会の中堅世代化**
→ “孤人（主義）化”社会・世代が再生産する次世代は？？
- 疎外（“孤人化”）脱出＝“人間力回復”の方向**
「多様な他者との交流」と「地域社会を新しい親密圏に」（門脇 2010）など
対症療法や実践的意義も、理論上の基本は、現代における**都市のコミュニティないし地域共同体の可能性**。

(二) 日本における近代的な地域共同体の原理的可能性

1. 地域コミュニティと近代的な共同体

(1) 日本の都市コミュニティのイメージ：

「生活の場において、市民としての自主性と責任を自覚した個人及び家族を構成主体として、地域性と各種の共通目標をもった、開放的でしかも構成員相互に信頼感のある集団」（内閣府報告書『コミュニティ——生活の場における人間性の回復』1969）。
→市場社会化前提の市民社会の理想。**前近代的束縛から解放された自由な市民による近代的な共同体**

Cf. マッキーヴァー（1917）「コミュニティ」：共同体の歴史貫通性、近代の共同体の基礎づけ（中 1991）。

(2) 高度消費社会化でのコミュニティ（近代的な共同体）の未実現と理念化（イデオロギー化）；蓮見（1984）生活の全面的市場化。消費生活圏域の地域性喪失、親密圏の趣味的サークル化（情報社会化で脱地域化）

2. 高度消費社会と近代的な共同体の帰結

高度消費社会の地域的共通のモデル＝竹井（2007）：集合住宅の「共同性」論。

- (1) 人間関係の「選択縁」化の現実から、コミュニティ論の伝統的共同体（「親和性」）呪縛を批判、近代的「共同」＝自由な個人のアソシエーション。機能：「自治」・理性的な民主的討議で「ガバナンス」→地域共同体のモデル：「地縁」（共通課題：共有財産管理と居住の安全）による集合住宅の「共同性」（「自治」）
- (2) 高度消費社会に定位。近代的な共同体の“純化”。生活空間からの地域共同体（cf. 社会学の“空間論的展開”）
- (3) 高度消費社会での集合住宅「共同」性の空洞化・解体
 - 1) 「共同」の主体：隣人見知らぬ“孤人”。生活必要の市場調達→生活的共同への内発的志向なし。
 - 2) 地縁的「共同」の2つの必然的根拠も市場化（管理会社、警備会社任せ）。cf. 「カウンセラーマネージャー」制？
 - 3) 集合住宅の原理：個人の退去の自由前提。居住の一時性感覚で地縁（的共同）の主体的引き受け？

○**親和的共同性の否定→自立的个人の連帯的共同（＝アソシエーション）不可能**。“人間の危機”克服も×
→**伝統共同体解体後の市場的近代共同体の帰結**。 Cf. アソシエーションとコミュニティ（マッキーヴァー）

3. 近代的な共同体論の現代的修正

——改めて、市場に埋没しない“共同体”、伝統的共同体再評価の近代的な共同体像・コミュニティ像の要請

Cf. 広井良典（2007）のポストモダンの地域福祉コミュニティ論

- (1) コミュニティ＝構成員が「帰属意識をもち」「連帯ないし相互扶助の意識」が働く集団。
コミュニティの3次元（→地域コミュニティの要素？）と交差：①生産コミュニティと生活コミュニティ、②農村型コミュニティと都市型コミュニティ、③空間的コミュニティと時間的コミュニティ（テーマコミュニティ）

- (2) 文明史的な「ポスト産業化時代」：地域“定着”の老人・子供を軸に**ケア原理の地域生活コミュニティ**
- 1) 近代が解体した**前近代的共同体の機能**（自然基礎の宗教・教育・経済の一体性）の**現代的回復**
「コミュニティの中心」確立と連携：「福祉」「環境」「スピリチュアリティ」「研究（創造）」 cf. 経済×
 - 2) **異なるコミュニティ形成原理の明確化と、「バランス」の必要**
「都市型」（「規範的」「個人をベースとする公共意識」）を基本に、「農村型」（「情緒的」「共同体的な一体意識」）も。
 - 3) 地域（「空間コミュニティ」）における脱地域的「テーマコミュニティ」の意義 NPO、ボランティア…
- “孤立”時代と“人間の危機”克服の方向に対応したコミュニティ論（「親密圏」と「多様な交流」門脇 2010）
- (3) 理論的難点：高度消費社会から内発的転換の可能性は？
- 1) **コミュニティ要素間の内的連関不在**——並立？ 「農村型」も必要、で済む？
 - 2) **転換の主体・プロセスの不問** “**孤人（主義者）**”が**内発的にどう“共同”へ向かうのか？**
「農村型」原理不在から地域コミュニティがどう実現？ Cf. 公共性・アソシエーションのみでは失敗（竹井）
親和性（「農村型」）忌避の“孤人（主義）”がどう親和的共同関係に参入（ないし欲求）するのか？
●老人・団塊世代が発動？ ボランティアから自然成長？→→ だが“孤人主義”者にはサービス？
→→実践的、対症療法的意義も、理論的・戦略論的には？ “外部触発→目覚め”論は要検討も。

(三) <農>の営みの現代的意義

1. **疎外のデススパイラル構造の環**：②**共同性喪失**（→①自己喪失、③心身力衰弱）→共同性の忌避の**悪循環をどう切断？**
○**転成的欲求**に注目の必要——“孤人（主義）”の即自的な内発的欲求の充足が必然的に共同性欲求を誘発……
→→ “孤人化”でもなお（否、それ故に一層）強い**自然への欲求**。
2. **<農>の営みの“人間力”回復の“決定的”意義——特に共同性への欲求の媒介的誘発の意義**。
Cf. 原生自然体験や自然観光・田舎旅行…。一時的癒し効果も、受動的関わり。“自然の消費”の危険
<農>の営み・農的生活：共同作業、共同関係、身体力の不可欠性 自然の「偉力」（三澤勝衛）・農の作法
——自然（農）への欲求から共同性欲求誘発・達成感・自己実現、生命的響感、身体力へ…→相乗効果
(1) <農>の疎外脱出（→克服）的意義 多様な<農>体験・<農>的生活論（若者にも志向それ自体は…）、
(2) <農>の人間（学）的意義——コミュニケーション論からのマルクスの労働概念（尾関 1992）
（農的）労働（共同性の中で）→自己確証・悦び→人間性・人間的能力の発達・・・の相補的循環
現代では特に、<農>の人間自然の生命的交通性（→**肉体の自然力と外的自然と生命的響感**）の**意義**
3. **<農>的共同態（＝<農>が媒介する共同関係）→→脱近代（脱疎外）の地域コミュニティのテコ**
(1) 風土的農山村・里山での<農>（的共同態）の全面的意義。 疎外克服・子ども人間力形成“基地”
(2) 都市での自然保護・サトヤマ化運動の<農>（的共同態）への出発点・媒介的意義
自然（への関わり）欲求→協同→自他の生命的響感・悦び→共同性欲求。都市の風土“再生”・地縁的共同社会へのテコ。

(四) <農>的共同が要請する**伝統的共同性の再評価**——<農>的共同態は何を継承？ 内山共同体論（2010）

1. 大塚共同体論の全面批判——70年代「新農本主義」、民俗学・農村社会学、玉野井「地域主義」の継承
“むら＝**前近代的共同体＝封建性（歴史的解体）** VS 都市＝市民社会・近代的個人の共同体”図式の否定
2. “むら＝歴史的共同体”の伝統の現代的意義の提起
①**共同体＝「自然と人間の共同体」**の提起——日本の共同体の歴史における自然信仰の意義から。
従来の共同体論の暗黙前提にメス。風土（人間自然共生）軸の地域＝自然との空間共同体の意義（亀山 2009a）。
②**共同体（精神）の多層性**の提起。——歴史的共同体の特徴から
共同体単一構造の先入見×。むら（共同体）＝ゲームインシャフト＋アソシエーション的サブ共同態の複合
2. 内山共同体論の理論的難点 ——基本は、**近代的共同体論の批判的検討不在ゆえの近代主義？**
Cf. “共同体＝共同体の精神”論も——伝統的共同体への実践的勧め？ トクヴィル精神の習慣論、都市の共同体の記憶。
(1) 共同体を日本精神の「基層」から基礎づけ。 「基層」文化論のイデオロギー性、時間の普遍主義（1989）
(2) 共同体の現代社会的基礎・共同体の構造の検討不在。 積年の近代批判・<農>的労働の位置も？
(3) 「むら」的内容の豊富さも、**結局は市民（都市型）の近代的共同体論**。近代個人主義の呪縛。
伝統的共同体は自立的個人を前提——個人主義（共同体離脱原理）の強烈的な主張。 →（五）の4へ

(五)〈農〉が照射する近代的共同(体)論の問題性——マルクス主義系市民社会論

1. 大塚以来の近代化図式の疎外論的“温存”と破綻

“むら＝前近代的共同体(没個人)”の解体による“近代的(自立的個人の)共同体”図式の“温存”

大塚図式批判：むら論(歴史的解体×)、小谷歴史学(近代主義のアジア的共同体矮小化→マルクス共同体論再評価)も…。

- (1) 平田清明(1969)の影響：前近代的共同体の**歴史的止揚としての市民社会(近代的共同体)**論。
- (2) 近代化図式“温存”の歴史的背景：天皇制ファシズム、農村の“貧困”経験→民主主義、都市化の希望
“温存”の理論的“免責”(共同体解体後の市民社会未実現の弁証)：近代的後進性論ないし近代の疎外論で。
- (3) “人間の危機”：大塚図式・市民社会論の前提の(自立的)個人自体(アトムか共同的か以前の人間力)が崩壊

2. 類的能力・人間性の実体的な個人内在の自明視(楽観的前提)と破綻

- (1) 大塚(近代主義)批判の焦点：資本主義社会の理念的肯定と、他方で個人のロビンソン性(単独性)。
個人概念は類の本質(共同性)とセット→近代的個人は必然的に共同体(＝市民社会)。平田1969
- (2) 資本主義的**疎外による個人の単独化(アトム化)＝共同性喪失(＝利己的人間の敵対関係)**
だが、**自己(アトムの個人・利己的自己)と、否定態でも類の本質(類的能力)自体は大前提→克服のテコ**
Cf. 近代的個人は類の本質(理性・道徳性・愛を原理とする共同性)を内在(フォイエールバッハ)も、それは社会関係の総体で、資本主義社会の疎外で類の本質が否定的形態に転化(手段的理性・利己主義・“敵対心”を原理とする対立性)。
Cf. **(一)節の疎外の総括的特徴(亀山1989)も。**
- (3) **理論的にも、市民社会論は人間の本質的能力の個人内在(実体的内在)の前提。** Ex.似田貝香門(1984)
 - 1) マルクスでは「類的本質」が「ゲマインヴェーゼン」に転化したとして『ミル評注』から引用。
 - ①「共同的存在 Gemeinwesen」が「人間の本質 wesen」ゆえ、「**a人間はその本質を発揮することによって人間的共同体 Gemeinwesenを、即ち個々人に対立する抽象的な普遍的力にならない…社会的組織 gesellschaftliches wesenを生み出す**」
 - ②この「人間の本質」は、「個人の必要 Not と、**eエゴイズム**」＝「個人的自己実現の要求」に由来。
 - ③「**人間的共同体**」＝自立した個人の「**a社会的組織**」＝「市民社会」(望月清司に依り下線部cとdの同一性を強調。
 - 2) 似田貝の市民社会(＝近代的共同体)論の前提
 - ①人間の本質(力)の個人内在。Gemeinwesenを内的本質(素質)＝「共同的存在」と外的形態＝「共同体」と訳し分け。後者＝前者の発現(外化)(特に下線部a)。大前提は個人の内奥に近代的自我(下線部b)。
 - ②共同性 Gemeinwesen は、近代では自立的個人(エゴ)の社会性 Gesellschaftliches wesen に転化。
協同性＝人間的共同性、協同体(アソシエーション：市民社会)＝人間的共同体。資本主義的個人を出発(下線部b)。**⇒⇒市民社会的共同体論は実体的自立的個人を前提し、共同体を協同体に還元** cf. 竹井・広井と理論的同型性。
- (4) マルクス Gemeinwesen 論はフォイエールバッハ共同存在論(→〈農〉的共同)の前提を“忘却”
「人間は自然によって存在し、人間によって人間になる」→共同主義 Kommunismus。内的な類の本質 Gattungswesen は、自然を基礎とする我と汝の身体的共同関係(→外的な共同関係)の中でのみ現実存在、人間は本質的に共同人 Gemeinmensch。

3. 共同社会の“共同”原理の重層性の度外視：

→脱近代の共同社会の理論ポイント

- (1) **市民社会論の「共同性」＝協同性の再確認。** 自明視された**共同性(共同態)を独自に主題化**の必要
→→両者の媒介関係(共同社会における協同態と共同態の固有の意味と相互規定関係)の明確化
(自立的)個人の協同態の基礎に、**個人の存在条件として我一人関係の身体的共同態の不可欠性**
- (2) **協同原理と共同原理の相違の明確化**：結合の外的・一時的同一性(共通性)と内的・本質的同一性(共有性)
相違の根本：**個人から出発の結合と、個人(自己)の前提の結合**——目的的结合と結合の自己目的性(先在性)
Cf. 従来の類型化(差異性に基づく連帯(理性的結合)と同質性に基づく同化(心情的一体)、人格的結合と没人格的融合)
→→短絡的一面性：家族(共同態の典型)も差異や人格自立の承認は前提。「都市型」と「農村型」との類型化は大×
○理性的結合か情緒的結合かの無意味(共同性も協同性も両面。この区別は結合の範囲・時間に依存)
- (3) **共同には個人間の内的同一性(≠全面的同質性)が不可欠** cf. 関わりの作法・心情の「共有」、風土のモラル
——アプリアリな実体的“人間の本質”でなく、先在の共同態参入で経験的に内面化・受肉化(＝**本来の意味で Gemeinwesen**)

- (4) 諸個人が属する単一構造的な基本単位は不可能 cf. 内山多層性論、広井のコミュニティの3次元
近代・グローバル時代の諸個人の関係(差異、対立、協同、共同…)の多様多層性。
→共同社会とその契機としての共同態と協同態と、その多面的重層性
- (5) 生活の基本単位(=地域共同社会)の必然性と〈農〉的共同態の基盤性——現代の“人間危機”から
生身の生活にとっての日常的な身体的共同の不可欠性とその時空的限界

4. “個人の自立”の多層的内実の短絡と近代固有の内容の不問

——従来の伝統的共同(体)論の“アキレス腱”＝“個人の埋没”という図式の見直しの必要

- (1) 共同体論・近代化論における「個人」と「自立」の錯綜と多層的内実(亀山2009b)
「個人」——イ) 社会の最小単位 Individuum、ロ) 個々人 Einzel Mensch、ハ) 自己 Ich、ニ) 公に対する私 Privatmensch。
「自立」——ホ) 社会の権限関係における自立(①国家・政治体における構成員の政治的自立・権利主体、②権力・権威・
他者に対する意志の自由＝自己決定、③公的空間の私事への不可侵)、
ヘ) 価値関係における自立(①個性の独自性、②個＝この私の唯一性と至上価値)、
ト) 人格的自立(①政治的、②倫理的、③宗教的 or 実存的) cf. 心理的自立
チ) 存在としての自立(①各人の経済的自立＝他者への非従属、②個体の単独存在)。
- (2) “個人の自立”の多層的内実の“近代的個人”還元と、伝統的共同体＝“個人の埋没”イメージ
自立的個人＝個々人(イ、ハ、ニ→ロ)の政治的自立(ホ③②→①)と存在の自立(チ①→②)に収斂
- (3) 相関的に、伝統的共同体での“個人の自立”の多層的内実の存在の無視——価値的自立(ヘ)など
→近代的個人主義の共鳴者は、人間的基礎(自己性や自立の思想的契機)を伝統的共同体の中で形成
“むら”で育ったからこそ近代的個人主義を主張しえたのに、それを実践的理論的に忘却!

○歴史的共同体(社会)における“個人の自立”の多層な内実が脱近代的共同社会にどう継承されるべき?

- 1) 特に、共同社会における“個人”の“自立”と“共同性”の連関と相互関係は?
共同態依存の倫理的人格自立→協同態の中の政治的自立、協同態と共同態の相互依存、協同性の共同性への転成…
- 2) “個人の自立”の多層的内実近代(市場社会)が固有に付加した契機は何か?
①“土地”からの個々人の“自立”(離脱の自由・売買の自由)、②“自然”からの人間・社会の“自立”(遊離)、
③他者からの個々人の生活の“自立”(“孤人”の“生存”の自由)…
→歴史的功罪は? Cf. 共同体における個人主義の短絡的主張は、近代主義の普遍化(内山)

●残された問題

1. 都市化・過度の都市集中と〈農〉的共同態の現実的可能性——〈農〉と農業の関係、政策転換の必要
2. 地域共同社会における共同態と協同態の構造(——特に〈農〉的共同態の基盤性)のモデル化
——風土をコンセプトとする地域づくりとの関係
3. 歴史的共同体・〈農〉的共同態における“個人”の“自立”と“共同”の契機(多層な内実)の連関構造

《主な参考文献》

- | | |
|--|--|
| 1 東浩紀 2001 『動物化するポストモダン』講談社新書、 | 2. 門脇厚司 2010 『社会力を育てる』岩波新書、 |
| 3. 内山節 1989 『自然・労働・協同社会の理論』農文協、 | 4. 内山節 2010 『共同体の基礎理論』農文協 |
| 5. 尾関周二 1992 『遊びと生活の哲学』大月書店、 | 6. 尾関 2009 「〈農〉の思想と持続可能社会」(『環境思想・教育研究』第3号) |
| 7. 小野塚知二・沼尻晃伸(編著) 2007 『大塚久雄「共同体の基礎理論」を読み直す』日本経済評論社 | |
| 8. 亀山純生 1989 『人間と価値』青木書店、 | 9. 亀山 2009a 「地域再生のコンセプトとしての風土の意義」唯物論研究協会年誌 14号 |
| 10. 亀山純生 2009b 「風土のモラルが照射する近代的個人観の陥穽」(亀山編『風土的環境倫理と日本の自然観』科研費報告書) | |
| 11. 竹井隆人 2007 『集合住宅と日本人』平凡社、 | 12. 豊泉周治 2010 『若者のための社会学』はるか書房 |
| 13. 土井隆吉 2007 『友だち地獄』ちくま新書 | 14. 中久郎 1991 『共同性の社会理論』世界思想社、 |
| 15. 似田貝香門 1984 『社会と疎外』世界書院 | 16. 蓮見音彦 1984 「地域社会」(北川編『現代社会学辞典』有信堂高文社) |
| 17. 平田清明 1969 『市民社会と社会主義』岩波書店、 | 18. 広井良典 2009 『コミュニティを問い直す』ちくま新書、 |